

「器楽・声楽」の授業における事前指導の研究

——アンケートに基づく弾き歌い曲習得状況の分析 (2) ——

武藤 純子・秋山 文代・大西 ゆみ
喜多 ちえ・幸野 紀子・堀崎 峰子
由井 敦子・坂井 康子

A Study of Preliminary Instructions at Instrumental and Singing Courses: An Analysis of Student Surveys on Acquiring the Skill to Simultaneously Sing and Play the Piano (Part 2)

MUTO Junko, AKIYAMA Fumiyo, ONISHI Yumi, KITA Chie,
KONO Noriko, HORISAKI Mineko, YOSHII Atsuko and SAKAI Yasuko

Abstract: This study explores the effect of preliminary instructions on college students' ability to learn new songs to sing while playing the piano during piano lessons offered in the Department of Childhood Development and Education at Konan Women's University. Although students are required to learn various types of pieces for simultaneously singing and playing the piano to complete the "Instrumental and Singing I and II courses," which are courses for kindergarten, elementary school, and nursery teacher training, there are occasions when it takes great effort and time to do so. That is, there are pieces which have complicated rhythms typical of popular music, and tunes that students are unfamiliar. Because students get only a limited period of time to learn musical pieces during piano lessons, at kindergarten, and elementary school and nursery school environments, it is essential for them to learn these pieces efficiently. Based on the results of student surveys conducted in 2018 and 2019, we analyze the effect of preliminary instructions on students' skill acquisition in simultaneously singing and playing the piano, and examine efficient ways to introduce these preliminary instructions.

Key Words: Music Education, Simultaneously Singing and Playing the Piano, Preliminary Instruction, Piano Lesson, Rhythm, Kindergarten, Elementary School and Nursery Teacher Training

要旨：本研究の目的は、甲南女子大学人間科学部総合子ども学科の幼稚園教諭・小学校教員養成、および保育士養成における「器楽・声楽 I, II」の授業内のピアノ実技指導に関して、演奏が困難な弾き歌い曲や未知の曲の習得に、事前指導の導入がどのような効果があるかを明らかにすることである。本授業では、様々な弾き歌い曲の習得を必須としているが、ポピュラー音楽などに代表されるリズムが複雑で難しい弾き歌い曲や、学生にとって未知の弾き歌い曲の場合、その習得は大変な努力と時間を要する。実際、授業内であっても、保育、教育の現場であっても、必要とされる曲の習得に掛けられる時間は限られており、効率的な曲の習得の為の指導は必要不可欠である。そこで、2018年度と2019年度のアンケートデータから、事前指導の導入によって学生の習得率は上がるのか、また、どのような事前指導が効果的なのかを比較分析する¹⁾。

キーワード：音楽教育、弾き歌い、事前指導、ピアノ指導、リズム、幼稚園教諭・小学校教員・保育士養成

IV アンケート調査結果と考察

2) 《みんなともだち》の達成状況

ここではアンケート質問 (2) の 1 週間での達成状況について述べる。図 4 の「2018 年度・2019 年度《みんなともだち》達成状況比較」は、2019 年度のアンケートに回答した学生 163 名が 1 週間で 1 時間程度の練習によって、アレンジ A-D のどこまで習得できたかを、2018 年度の結果と比較して示している。先に述べた様に、2019 年度はアンケートの内容や伴奏アレンジの改良に加え、事前指導を導入し、練習時間も 1 時間に増やした為、単純比較は難しいが、最も難しいアレンジ D (2018 年度のアレンジ 5 番) まで習得出来た学生は 25% で、2018 年度の 20% を明らかに上回っている。アレンジ C は 2018 年度のアレンジ 4 番に比べ和音の種類を少し易しくしたものだが、2018 年度の 24% に比べ、2019 年度は 45% の学生が習得出来たと答えるなど、飛躍的に習得率が伸びている。また、2018 年度は 5% の学生が 1 番のアレンジも弾くことが出来ないと答えたが、2019 年度は全員が少なくとも 1 曲目のアレンジ A は弾けたことが分かる。2019 年度の 2 曲目アレンジ B に関しては興味深い結果となっている。これは 2018 年度のアレンジ 3 番と同じだが、2018 年度に 27% だったのが、2019 年度は 10% と大きく数字を減らしている。これはアレンジ C の和音の種類を少し易しくした為、アレン

ジ B で終わらずにアレンジ C まで習得出来た学生が増えた為と考えられる。そこで、アレンジ B とアレンジ C を足したパーセンテージをアレンジ 3 番とアレンジ 4 番を足したパーセンテージと比べると、2019 年度のアレンジ B とアレンジ C は 55%、2018 年度のアレンジ 3 番とアレンジ 4 番は 51% と、やはり 2019 年度の方が習得率が上がっていることが分かる。

図 5 は 2019 年度の経験年数別達成状況の内訳である。注目すべき点は、大学入学までピアノ未経験だった学生の達成状況である。上から 2 段目が未経験の学生の達成率であるが、アレンジ A までしか弾けなかった学生は 44% と半分を切っている。それに対して図 6 に示した 2018 年度の内訳によると、どのアレンジも弾けなかったと答えた未経験の学生が 16% おり、アレンジ 1 番しか弾けなかった学生 35% と合わせても 51% の学生がアレンジ 1 番以下、アレンジ 2 番までの学生を合わせると 70% が 2 番以下しか弾けなかったという結果であった (2019 年度のアレンジ B と 2018 年度のアレンジ 3 番が同じである為、このアレンジ A の 44% という数字は、アレンジ 2 番以下の 70% という数字と比較して差し支えないものと考えられる)。更に、経験 1 年未満の学生を見てみると、2019 年度は一番難しいアレンジ D まで達成出来た学生が 12% となっていることが分かる。2018 年度のアレンジ 5 番まで達成した経験 1 年未満の学生 0% と比べて、12% というのは飛躍的に伸びたことが分かる。以上の様に、経験年数別に 2018 年度と 2019 年度の達

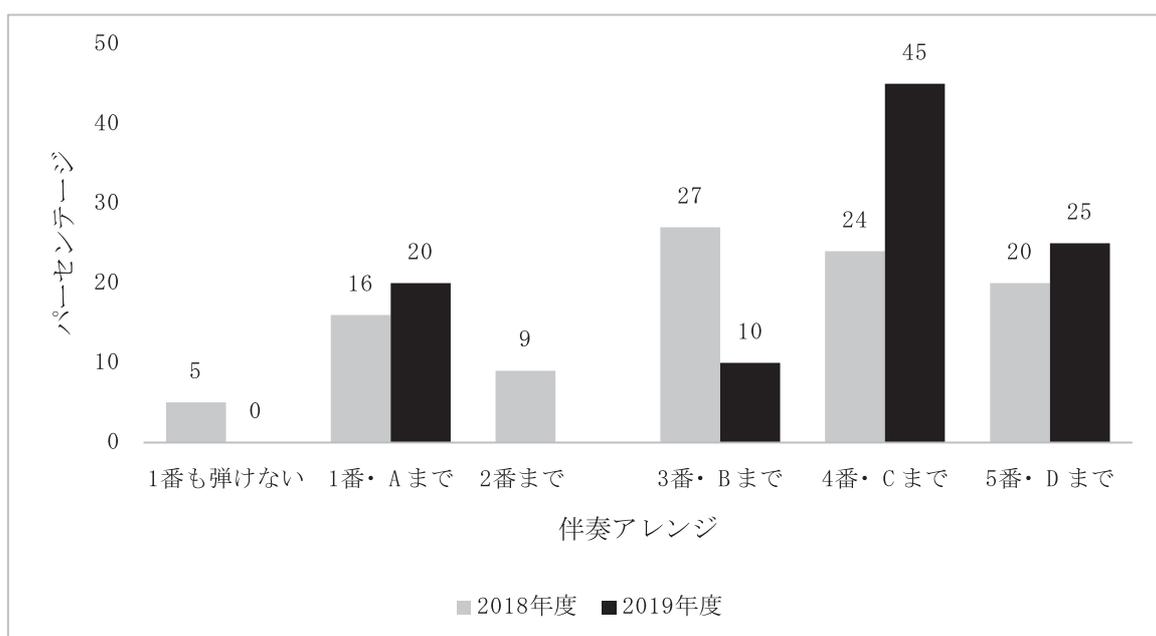


図 4 2018 年度・2019 年度《みんなともだち》達成状況比較

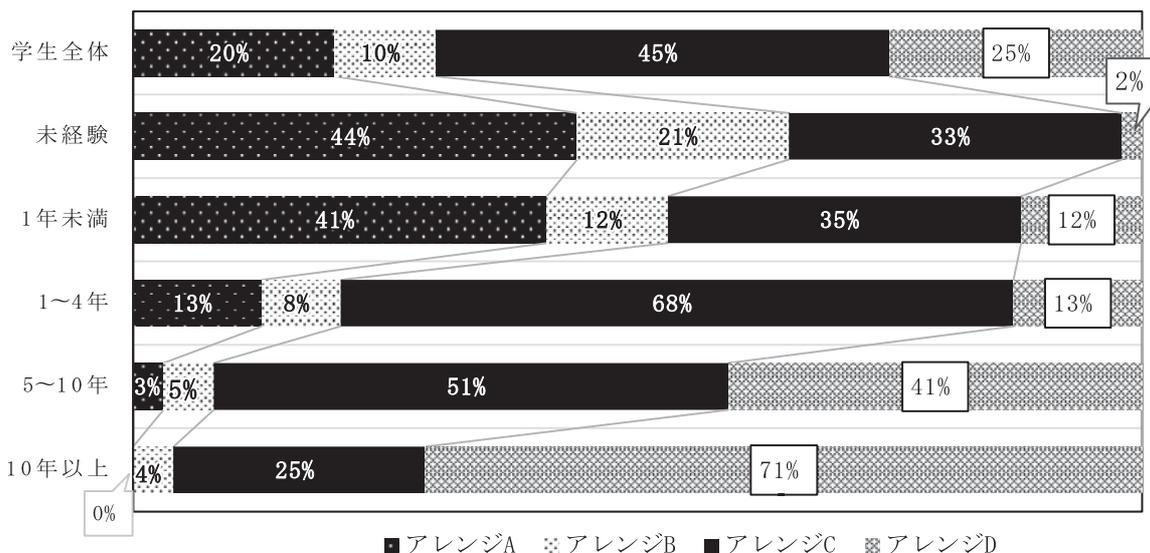


図5 2019年度《みんなともだち》経験年数別達成状況

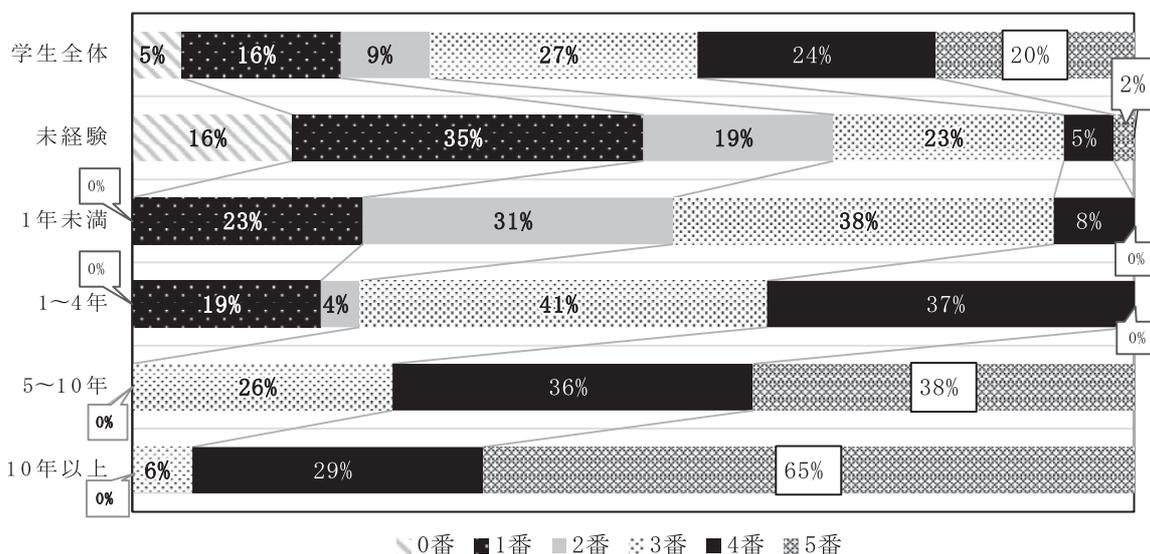


図6 2018年度《みんなともだち》経験年数別達成状況

成状況を比較すると、経験の浅い学生ほど大幅に伸びたことが明らかである。

3) 事前指導の効果について

2019年度のアンケートにおいて一番大きく変更した点である事前指導のプロセスについては、第III章で詳細を説明した。ここでは、その事前指導についての学生の率直な意見とその効果について考察したい。図7に示した様に、アンケート質問(3)の事前指導が役に立ったかという質問に対して、約6割の学生が役に立ったと自覚している様子が窺える。まあまあと答えた学生も含めると、97%もの学生がある程度の効果は感じているという結果になった。

次に、事前指導の種類別にアレンジA-Dの達成状

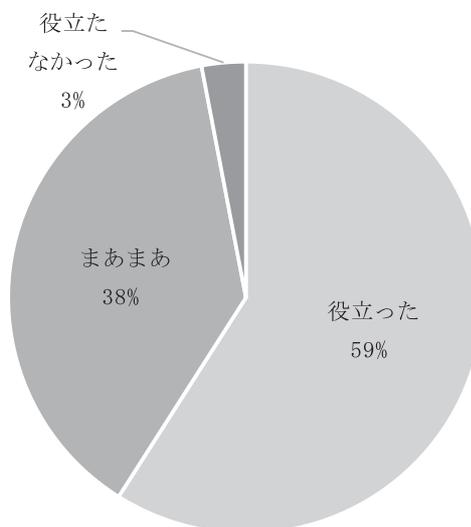


図7 事前指導は役に立ったか?

況を考察する。今回の事前指導では、クラスによって異なる内容としたのは先に述べたとおりである。クラス 1 の事前指導はごく簡単で短時間で終わるものであり、クラス 2、クラス 3 の順に徐々に項目を増やし、クラス 4 の事前指導は最も多い項目で時間をかけたものとした。

この事前指導時の学生の反応は、クラス別に次のとおりである。クラス 1 では、教員の演奏を聴くだけの為、手持ち無沙汰の感が漂っていた。伴奏型が異なっているとはいえ、4 回も同じメロディーをただ聴くだけというのは退屈に感じたと思われる。しかし中には、一緒に口ずさんだり、控えめではあるがリズムを取ったりしながら、曲を習得しようとする意欲的な学生も数名見られた。クラス 2 は、一緒に歌うという作業が加わったことにより、伴奏型の違いを聴き取りながら堂々と歌い、アレンジ D に到達した時には曲のイメージがつかめた様子であった。声を出すことで、曲への親しみが増した様に見受けられた。クラス 3 は、歌いながら左手伴奏のリズムを打つ作業が加わり、学生間に差が出始めた。日頃の授業でも、弾くことと歌うことの両立は難しく、弾くことに集中すると歌えなくなるのと同様に、歌いながらリズムを打つのは困難な様子が窺えた。クラス 4 は、クラス 1-3 の作業に、左手伴奏のみ弾きながら歌うことを加えた。この事前指導は初見で行う為、ピアノ初心者の多い「すみれ」と経験を積んだ学生の多い「つばめ」で明らかな差が出た。特にアレンジ D の時は、一部の経験者

は右手メロディーも一緒に弾ける学生がいた一方、全くお手上げ状態で諦める学生が多数いた。

事前指導の結果としてアレンジ A-D のどこまで達成できたかをクラス別にパーセンテージで示したのが図 8 である。一番難しいアレンジ D まで達成できた割合は、最も多い項目で時間をかけた事前指導をしたクラス 4 で 36% という一番高い数字となったのは当然としても、その次に細かく指導したクラス 3 が 13% と極端に低いパーセンテージとなっている。クラス 3 はその代わりアレンジ C までの学生の割合が一番高く 53% であったが、それでもアレンジ C とアレンジ D 合わせて 66% である。クラス 4 のアレンジ C とアレンジ D を合わせた 74% には遥かに及ばない。一方でクラス 3 よりも少ない事前指導しかしていないクラス 2 では、難しいアレンジ D まで達成出来たのが 33%、次のアレンジ C までは 38% で、合わせて 71% がアレンジ C またはアレンジ D まで達成しており、クラス 4 に次いで高い数字を出している。教員の模範を聴いただけのクラス 1 でさえ、アレンジ C 或いはアレンジ D まで達成したパーセンテージを合わせると 68% となっており、クラス 3 よりも高くなっている。この結果から導き出されるのは、学生の習得効率を上げるための事前指導は、必ずしも項目を増やして時間をかけるのが良いわけではないということである。学生が曲を把握するためのきっかけを与えることが出来れば、たとえ模範演奏を聴いただけでも、学生は十分に弾きこなすことが出来るということであ

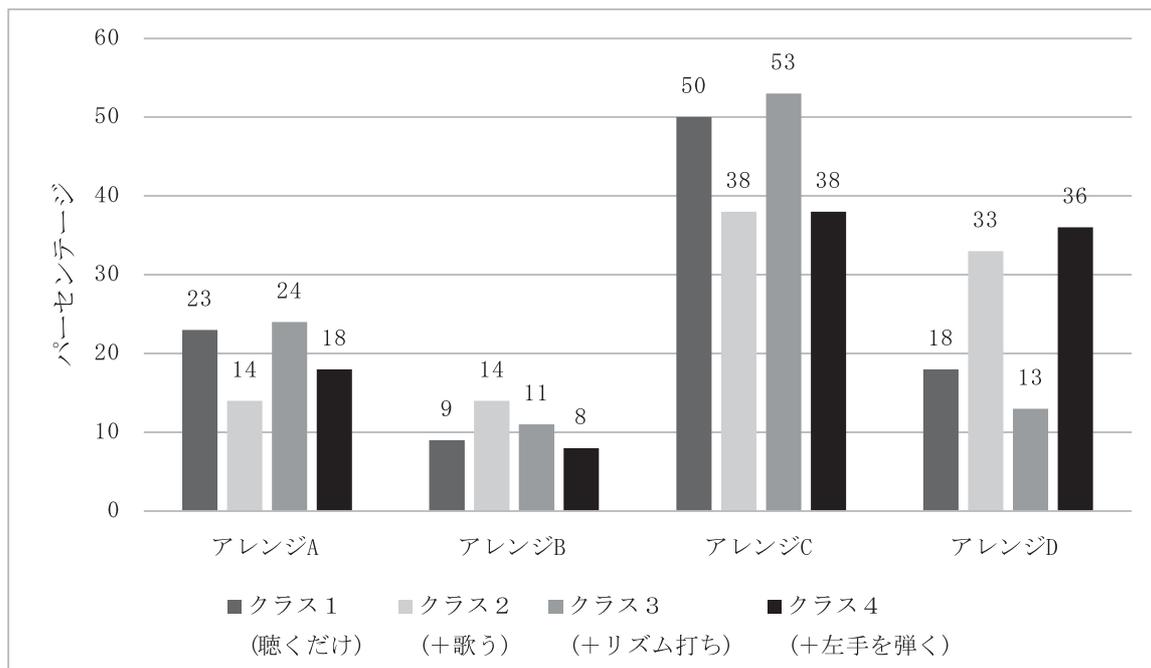


図 8 事前指導種類別 達成状況

る。但し、上記の事前指導時の学生の反応を考慮すると、教員の模範演奏をただ聴くという学生にとって受動的な事前指導よりも、教員の模範と一緒に歌う等、簡単に参加できるタイプの事前指導が望ましい。次にこの事前指導の効果について特徴的な事例を紹介するⁱⁱ⁾。

事例 1

【学生 A・クラス 3・ピアノ未経験・他楽器未経験・ダンス未経験・アレンジ C まで】

学生 A はピアノ未経験で読譜が出来ず、指をスムーズに動かすことさえ難しかったが、今回のアンケートでアレンジ C まで弾く事が出来た。器楽・声楽 I ではバイエルの 52 番から 85 番までの中から 10 曲を抜粋し課題としたところ、学生 A は、時間を要しながら通常より遅いテンポではあったが合格するに至った。学生 A は読譜が苦手なため、60 番台までの曲には、小節ごとにコードを色分けして塗るという工夫をした事が有効であった。バイエルが 60 番台に入った頃に、簡単なコード伴奏の弾き歌い曲を課題として与えたが、学生 A が合格した弾き歌い曲の数は、わずか 6 曲にとどまった。しかし授業回数を重ねることで読譜力が上がり、指もスムーズに動くようになり、器楽・声楽 II ではバイエルは 90 番台を演奏出来るようになった。学生 A が器楽・声楽 II で合格した弾き歌い曲は 13 曲で、選曲の難易度も上がった。

【学生 B・クラス 4・ピアノ未経験・他楽器未経験・ダンス未経験・アレンジ C まで】

学生 B もアレンジ C まで達成出来たが、器楽・声楽 I 開始時はピアノ未経験だった為、バイエルの 55 番から始めた。学生 B は比較的スムーズに指が動き、器楽・声楽 I で合格したのはバイエル 9 曲、弾き歌い曲 12 曲だった。また、器楽・声楽 II で合格したのはバイエル 100 番台を 1 曲、弾き歌い曲 14 曲で、ピアノに慣れ親しみ苦手意識を克服した様子であった。

2 名とも、アレンジ C の 25 小節目の C コードから 26 小節目の F コードに変わる左手のポジション移動が難しかったと同じ回答をしたことが興味深い。また、2 名とも 3 小節目の右手のシンコペーションが難しかったと回答したが、事前指導の成果があり筆者の予測を超える良い演奏が出来た。大学入学時までにピアノ経験が全く無いながら、アレンジ C まで正確に弾いたこの 2 名は、担当学生の中で今年度に行った事前指導の効果が顕著に現れた例である。この 2 名は、ピアノ以外の楽器の経験とダンスの経験が無い点も共

通している。

2018 年度と 2019 年度に担当した学生の《みんなともだち》のアンケートを比較すると、2018 年度はピアノ未経験の学生が 5 名おり、そのうち 1 名はアレンジ 1 番までしか演奏出来ず、2 名はアレンジ 1 番でさえ最後まで演奏出来なかった。アレンジ 1 番を最後まで演奏出来なかった 2 名の学生は、「曲を知らないのどの様に弾いていいかわからない」、「リズムが難しそうでやる気にならない」と述べていた。実際、1 年間を通して課題となる弾き歌い曲は、学生が自主的にテキストの曲集から選曲することが多い為、既知曲を選ぶケースがほとんどである。その為、学生が知らない曲は敬遠される傾向にある。一方で、2019 年度の調査では「《みんなともだち》は知らない曲だが授業で習ったから取り組みやすかった」との意見が出ている。これらのことから、2019 年度に行った事前指導は、メロディー、コード、リズムに慣れ親しむことによって学生に練習してみようという意欲をおこさせ、練習すれば最後まで演奏出来たという達成感を持たせることが出来、大いに効果があったと言える。

事例 2

【学生 C・クラス 4・ピアノ経験 3 年・他楽器未経験・ダンス未経験・アレンジ A まで】

学生 C は器楽・声楽 I で教則本をバイエルから開始し、バイエル 4 曲、ブルグミュラー 1 曲、弾き歌い曲 9 曲、リズム曲 4 曲を合格した。学生 C は思うように指を動かせないという苦手意識があり、特に弾き歌いに難しさを感じている様子であった。学生 C は続く器楽・声楽 II でも地道に課題をこなし、器楽・声楽 I と合わせて最終的には、バイエル 8 曲、弾き歌い曲 19 曲、リズム曲 4 曲、ソナチネ 1 曲を仕上げた。曲数としては単位習得の合格ラインぎりぎりという学生であった。

《みんなともだち》は、アレンジ A を弾いたが、右手メロディーのタイが小節を越えて現れる 10-11 小節目などで拍感に迷いが生じて、左手とのタイミングがとりにくいようであった。その他、メロディーのミスタッチなど音楽的な流れがスムーズではない部分もあったが、知らない曲を事前指導によって耳に馴染ませることができた為、自宅では練習に取り組み易かったようである。ただし「教員の模範演奏を聴いた後、自分自身も何度も繰り返して弾き歌いをしたので、事前指導としては量が多かった」と述べていた。たとえ初心者であっても「事前指導の回数は、多いほど効果

的」とは限らないと言える。

4) 他の楽器やダンスの経験について

アンケート質問 (4) は、授業以外での他の楽器やダンスの経験についてのものである。この質問は複数回答可である為、パーセンテージの集計よりも実際の人数で結果を示す。今回のアンケートに参加した 163 名のうち、授業以外で他楽器の経験がある学生は 53 名、授業以外でダンスの経験がある学生は 32 名であった。同じ学生が他楽器も、ダンスも経験しているケースも含んでいる。反対に、授業以外でどちらの経験もないと答えた学生は 79 名で、約半数の学生が大学入学までにどちらも経験したことがないことが分かる。学生の経験と今回のアレンジの達成状況との関連については、個人的要素も多分に含まれている為、特徴的な事例を経験者と経験のない学生の対比を中心として以下に紹介する。

事例 3

【学生 D・クラス 2・ピアノ経験 8 年・他楽器未経験・ダンス未経験・アレンジ D まで】

学生 D は、器楽・声楽 I ではブルグミュラーから開始した。部活動で合唱の経験もあり、音楽についての知識や経験も豊富である。ピアノに関しても、曲の特徴をつかんでメロディーを音楽的に表現出来、毎回の課題にも意欲的に取り組む学生である。しかし、《みんなともだち》では、学生 D はアレンジ D の左手のリズムへの対応、またこのリズムに右手のメロディーを合わせることが難しい様であった。

ピアノの経験が 10 年以上あり、演奏のテクニックとしては多くの引き出しを持っているはずの他の学生でも、学生 D と同様にアレンジ D のリズムには対応しにくい傾向にあった。この原因は、右手のメロディー重視で弾いてきた積み重ねも一因ではないだろうか。今後、様々なリズムの曲に対応していくために、音楽におけるベース音の大切さを認識させる必要がある。

【学生 E・クラス 1・ピアノ未経験・他楽器未経験・ヒップホップやジャズなどのダンス経験 13 年・アレンジ C まで】

学生 E は、ピアノ未経験のため、器楽・声楽 I はバイエルの 50 番台から開始した。毎回の課題にかなり意欲的に取り組み、約 4 か月後の試験ではブルグミュラーの《バラード》、器楽・声楽 II の試験ではソナチネアルバム の 1 番を演奏できるまでに上達した。読

譜に関しても日々努力を重ねたと思われる。学生 E は、今回の課題ではアレンジ C に取り組んだが、難しかった個所として、右手のメロディーの弾き方を挙げていた。またアレンジ C の左手に関しては、付点 2 分音符+4 分音符のリズムへの対応が難しいと挙げていたが、左手のリズムにメロディーを合わせることへの違和感はないようであった。

近年、ヒップホップダンス等の経験者が増加しているため、未経験者であっても様々なリズムへの対応は柔軟になっていると感じる。その力を活かすためにも、基本的な読譜力を養い、練習を繰り返すといった日々の取り組みを習慣づけさせる指導が重要であると考える。

この事例 3 では、特にリズムの観点からの特徴的な例として、ピアノ経験が 10 年弱で他楽器及びダンス経験がない学生と、ピアノ及び他楽器の経験がなく、ダンス経験が 10 年以上の学生に着目した。担当の学生 30 人のうち、ピアノ未経験者で入学前までの他の楽器経験者は 10 人、また、ダンス等の経験者は 11 人と、ダンスの経験者が近年増加傾向にあり、その中の 8 割がヒップホップダンスの経験者であった。また、幼少から現在まで 10 年以上ダンスを続けている学生も 4 人いる。

ピアノ未経験者を相対的にみると、他の楽器経験者については、楽譜の読み方、リズムのとらえ方は当初から身につけており、読譜などで困ることはなく、弾くことに慣れることで上達は早かった。しかし、他の楽器経験者の中でも、バンド活動の経験者は、リズム感は備わっているが、耳で聴いて音楽を作るというスタイルから脱却できず、読譜に時間がかかり、聞き覚えで弾く感覚が抜けない様に思われた。

ダンス経験者については、個人差はあるものの、全体としてリズムを体感的に捉える感覚が身につけており、特に左手のリズムが分かると、完成までのスピードが上がった。ピアノ未経験者でダンス経験者については、読譜力の差、課題への取り組みの差が、ピアノの上達に顕著に表れる傾向にある。

事例 4

【学生 F・クラス 2・ピアノ未経験・エレキベース 4 年・ダンス未経験・アレンジ A まで】

学生 F は高校時代軽音楽部に所属し、エレキベースを 4 年間経験していた。学生 F は器楽・声楽 I ではバイエルから開始し、読譜にも運指にもかなり苦勞していたが、《みんなともだち》はアレンジ A をテン

ポよく正確に弾けた。それに至る経緯を考察してみる。

学生 F は器楽・声楽 I ではバイエルを 57 番から開始するが、音符と鍵盤の一致がうまく出来なかったので、片手ずつゆっくりと丁寧に一音ずつ再現していく事から始めた。それと同時にリズム曲集で主要 3 和音の左手コードのポジション移動を根気よく練習させた。エレキベースをしていたからか、ベース音をイメージして弾くことは容易に出来るようになった。音階の運指が苦手なので、バイエルのハ長調、ト長調、二長調の音階や 75 番、83 番、86 番など旋律的で比較的弾きやすい曲を選んで練習させた。授業が始まって 3 か月半でようやくバイエルの課題 8 曲を終え（最も高度な曲は 100 番）、リズム曲集の《むすんでひらいて》をゆっくりだが弾けるまでになった。4 か月で初めて弾き歌いのテスト曲《こぎつね》を弾ける様になり、器楽・声楽 I が終わった。

器楽・声楽 II では、さらに現場で必要な弾き歌い曲のレパートリー習得を中心に授業を進めた。《ちゅうりっぷ》や《どんぐりころころ》の様な、よく知っているメロディーに主要三和音のコードを付ける程度の曲から始めた。それと並行してリズム曲《糸まき（走る）》《静かな湖畔（跳ぶ）》《かっこう（ゆれる）》の順に習得させた。学生 F にとって、特に付点のリズム（スキップのリズム）は難しいようだった。弾き歌い曲を 9 曲仕上げたところで《みんなともだち》のアンケートを実施。本人の感想として、「事前練習時に皆で何度も歌った事がとても役立ち、右手のリズムを難く弾く事が出来た」、「コードが 1 小節に 1 つだけなので、ゆっくり音を考える事が出来、リズムの難しいメロディーに集中出来た」などのコメントが挙げられた。事前指導で実際に歌う事が、一人での練習に大いに役立ち、また軽音楽の経験がポップな曲の習得に効果的だったと考えられる。

【学生 G・クラス 1・ピアノ経験 3 年・他楽器未経験・ダンス未経験・アレンジ C まで】

学生 G はダンスの経験がなく、長く体育会系の部活に所属している。アレンジ D まで練習してきたが、左手と右手のリズムのコンビネーションが全く出来なかったため、アレンジ C に変更した。

学生 G は器楽・声楽 I 開始時にはかなり弾けていたのでブルグミュラー 6 番から始め、1 か月足らずで弾き歌い曲に取り組み始めた。半期でやや難しいリズム曲 6 曲、弾き歌い曲 12 曲を完成度高く仕上げ、教則本テスト曲ではソナチネアルバム I の第 7 番 3 楽章

を易々と弾きこなした。学生 G は器楽・声楽 II もそのペースは落ちず、さらに難しいリズム曲 6 曲、弾き歌い曲 26 曲を仕上げ、アンケートに臨んだ。はじめはアレンジ D を弾いたが、2 小節目の左右のタイを同時にタイミングを取って弾く、9 小節目にみられる左手の付点とタイのコンビネーション、25 小節目の左手の C7 を入れるタイミングが難しいようだった。そこで、アレンジ C を弾かせたが、こちらは難く弾く事が出来た。左手のリズムの殆どが付点 2 分音符 + 4 分音符の組み合わせでシンプルなものだからと思われる。

学生 G はここまで多くの曲を真面目に精度高く取り組んでいたため、この結果は意外である。やはりピアノ経験の少なさ、体でリズムを感じる経験の少なさ、またクラス 1 である為に事前指導の内容の薄さが顕著に現れた例ではないだろうか。

事例 5

【学生 H・クラス 1・ピアノ経験 1 年・他楽器未経験・バレエ、ストリートダンス経験 3 年・アレンジ D まで】

学生 H は、幼少期にはクラシックバレエを習い、現在はストリートダンスを趣味としている。ピアノを弾く事自体は未熟なため、アレンジ D を完璧に弾くには至らなかったが、リズムは正確に捉えていた。

ストリートダンスでは振付を身体で覚えて帰り、家でその記憶を辿って練習するとのことである。ただし時間が経つにつれ忘れてしまい困ることも多いという。今回の《みんなともだち》の練習でも、事前指導でリズムは覚えたものの家で練習する時には記憶が曖昧になったそうだが、「落ち着いて楽譜を見ながら弾いているうちに、思い出して弾けた！」と喜んで取り組んでいた。

初心者の指導において、読譜力を身につけさせる事は必須であると考えられる。特に拍子やリズムを譜面から読み取る事は重要で、読譜によって捉えたりリズムや音を正確に指に伝達し、それを聴覚に記憶させた上で、反復練習するよう指導している。学生 H のグループには全くピアノ経験が無い学生がいた為、特にその読譜指導に時間を割いた。その結果、学生 H も楽譜を見ながら弾く事は容易に出来る様になった。

踊りが好きでリズム感が良く、身体で記憶することも得意、それに加えて読譜力も備わった学生 H は、事前指導が特に有効となった良い例だと思われる。

【学生 I・クラス 3・ピアノ経験 10 年・トロンボーン

表3 アンケートの楽譜を弾いて、難しさを感じたリズム（複数回答可）

①左手の ♩、♪ のリズム (アレンジ C の左手のリズムパターン)	49 名
②メロディーの ♩、♪ のリズム (全アレンジ共通のメロディーのリズム)	53 名
③メロディーのシンコペーション ♩、♪ (全アレンジ共通のメロディー 3 小節目の 1-2 拍目)	63 名
④その他 (自由記述) ・全アレンジの 7 小節目メロディーの 3 連符 ♩、♪、♪ ・アレンジ D 左手のリズム全体 ・右手タイと左手のコンビネーション (例: 全アレンジの 11 小節目) ・リズムパターンが突然変わる時	25 名 (9 名) (9 名) (6 名) (1 名)

ム以外の回答も含まれる為、参考として巻末の資料 4 に示す。

V ま と め

2018 年度と 2019 年度の 2 度に渡って行われた調査の結果、弾き歌い曲《みんなともだち》の様にリズムが難しい曲であっても事前指導を導入することで習得率が大きく変わることが明らかになった。特にその傾向は、初心者 of 学生に顕著に現れる。更に、事前指導の種類別達成状況のデータによって、事前指導の量は必ずしも習得率に比例しないことも分かった。つまりたとえ教員による模範演奏を聴いただけであっても、学生にとって曲を把握することが出来、メロディーやリズムを思い出しながら練習できれば、習得の効率は上がるということである。これは大学の授業という限られた時間内で指導をするために大変貴重なデータといえるだろう。但し、積極的な学びへの参加という観点に於いて、模範演奏を聴くだけという受動的な事前指導よりも、一緒に歌う等、学生が参加できる事前指導の方が有効である。本アンケートの結果は、当然のことながら日ごろのコード理論の授業による知識の積み重ねや実技レッスンにおける譜読みの指導に負うところも大いにあるが、やはり未知の難しい曲に譜読みから取り組むという事と、聞き知った曲に取り組むという事では結果に大きな違いが出るということである。ピアノのレッスンに於いて、譜読みの力をつける事は非常に重要であるため、バイエルなどの基礎を習得するための教則本に於いては自力で譜読みをすることが非常に大切であるが、学生の実力に対して困難な曲や複雑なリズムの曲を習得するためには、先ずその曲、そのリズムを体験させることでスムーズな導入が出来ることが本研究により分かった。重要なのは、学生が将来、保育・教育の現場に於いて習得が困難なり

リズムが難しい曲や未知の曲にぶつかった際に、模範演奏を聴くだけでも効率的に習得出来る様になるということがデータで実証されたということである。学生の音楽習得にあたって、様々な方向から指導することが重要であるのは論をまたない。読譜が容易に行えるような指導、事前指導などにおいて耳から音楽を捉えさせる指導、リズムを身体で覚えさせる指導、等々適宜組み合わせる導く事が必要である。

本研究は、武藤以下 8 人の共同研究である。アンケートの作成・分析は大西、喜多、堀崎、武藤で、アンケートの集計は大西、喜多、幸野、堀崎、武藤、由井で行った。アンケート用楽譜の伴奏アレンジは幸野、譜例の作成は由井、図表の作成は武藤が担当した。執筆は坂井の監修の下、III-2 は秋山、IV-3 の事例 1 は喜多、事例 2 は堀崎、IV-4 の事例 3 は由井、事例 4 は大西、事例 5 は幸野、事例 6 は堀崎が担当し、I、II、III-1、III-3、IV-1、IV-2、IV-5、V は武藤が担当した。事例の編集は喜多が担当した。

注

- i 本号では第 IV 章-2 から第 V 章までを (2) として掲載する。
- ii 事例は、各教員が担当学生の中から選んでいる。

参考文献

- 衣川久美子・山崎和子・由井敦子・坂井康子 (2017) 「総合子ども学科 学生の音楽経験と既知曲の傾向-2012 年度~2015 年度 アンケート調査による比較分析-」甲南女子大学研究紀要人間科学編第 53 号
- 衣川久美子・山崎和子・由井敦子 (2018) 「総合子ども学科 保育実習と幼稚園実習の傾向-2016 年度アンケート調査による音楽分野の分析-」甲南女子大学研究紀要人間科学編第 54 号
- 久保絃子 (2017) 「教科『音楽』におけるアプローチについての考察-ピアノ実技レッスンの事例を基に-」玉川大学教育学部紀要第 17 号

坂井康子・岡林典子・南夏世・山崎和子(2006)『幼稚園教諭, 保育士, 小学校教員をめざす人のためのピアノテキスト-歌おう♪弾こう♪こどもとともに』ヤマハミュージックメディア

坂井康子・岡林典子・南夏世・佐野仁美(2008)『教育・保育現場で毎日使える コードでかんたん!こどものうたマイ・レパートリー』ヤマハミュージックメディア

坂井康子・岡林典子・南夏世・衣川久美子・古庵晶子・篠原真紀子・山崎和子・由井敦子(2015)『3コードでOK なるほどかんたん!リズム曲集~保育・教育現場で楽しく弾けてすぐに役立つ~』サーベル社

佐藤千佳(2018)「教員・保育者養成におけるピアノ初心者に対する実用的指導法の考察:音価の観点から」川口短期大学紀要第32号

高崎展好(2016)「保育者養成における音楽表現のためのリズム・ソルフェージュ指導法」環太平洋大学研究紀要第10号

武藤純子・大西ゆみ・喜多ちえ・幸野紀子・堀崎峰子・由井敦子・坂井康子(2019)「弾き歌いの指導における簡易伴奏の研究-アンケート調査に基づく簡易伴奏スタイルの分析-」甲南女子大学研究紀要人間科学編第55号

資料4 アンケートの楽譜を練習して難しかった箇所(自由記述)
『《みんなともだち》』についてのアンケート(2019)より

アレンジ	難しかった箇所(自由記述)
A	11小節目などを全音符で伸ばす時に拍節感がなくなって難しい
	指使いが難しい
	メロディーのシャープやフラットが難しい
	7小節目の和音が掴みづらい
	7小節目のメロディーの3連符が難しい
	9小節目の左手和音だけの拍節感が難しい
	10-11小節目のメロディーのリズムとタイが難しい
	12小節目のメロディーのように急に4分音符のリズムになるところが難しい
	メロディーのリズムが難しい
	基本形と展開形の和音でポジションが違うので難しい
	25-26小節目の和音の跳躍が難しい
	最後の小節の2分音符の長さが難しい
B	和音の変化が難しい
	右手メロディーのタイと左手伴奏の2分音符のリズムのタイミングが難しい
C	11小節目などの左手和音だけの拍節感が難しい
	右手のシンコペーションのリズムが難しい
	11小節目などの左手和音だけの拍節感が難しい
	25小節目の急な2分音符+2分音符のリズムが難しい
	25-26小節目の和音の跳躍が難しい
D	伴奏の付点2分音符と4分音符のリズムが難しい
	和音にシャープやフラットが付いているのが難しい
	和音が複雑なので指使いが難しい
	左手9小節目などの付点のリズムとタイの組み合わせが難しい
	左手和音のシンコペーションのリズムが難しい
	2小節目の左右のタイを同時にタイミングを取るのが難しい
	3小節目の右手と左手の別々のシンコペーションのリズムの組み合わせが難しい
	左手の11-12小節目のような跳躍が難しい
	17小節目のような急な4分音符のリズムが難しい
タイが多くて難しい	
25小節目の和音のタイミングが難しい	